

自省録

2022. 3. 23

ふとテレビドラマを見ていた。私が自分の意思でドラマを見ることはほとんどない。対照的に家人はドラマ好きである。したがって、家人が見るドラマを何となく見ていることがある。そのドラマの登場人物が『自省録』という文庫本を手にしていて、マルクス・アウレリウス著である。

この著者のことは知っている。イタリアにいたときに、塩野七生の『ローマ人の物語』全17巻（文庫版は全43巻）を読破した。その中に出てきた人物である。それ以来、ずっと気になっていた人物である。

マルクス・アウレリウスは、第16代ローマ皇帝であり、ストア派の哲学者でもある。ローマ帝国には、国が始まって以来の平和と繁栄が訪れた期間がある。その間の皇帝は五賢帝と呼ばれる。マルクス・アウレリウスはその一人である。軍事よりも学問を好んだとされ哲人皇帝と称される。

『自省録』は、政治家としての日々の悩みや自らの行動を省みる言葉などを書き留めた12巻から成る備忘録である。公文書ではなく、あくまでも個人的に日々書き留めたメモ書き、覚書である。自分自身に対して時に対話するように、時にいさめるように書かれたものである。中には、今では名言となっているものもある。

- われわれの人生とはわれわれの思考が作り上げるものに他ならない
- 幸福はその人が真の仕事をするところに存す
- 良い人間のあり方を論じるのはもう終わりにしてそろそろ良い人間になったらどうだ
- 一つ一つの行動を人生最後のものごとく行え

英語圏では『Meditations（瞑想）』という題名で広く知られているが、日本では『自省録』という題名が定着している。ある章の最後には、次のことが書かれてある。

このほんのわずかな時間を自然にしたがって歩み、人生という旅を満足のうちに終わらせることだ。熟したオリーブの実が、自分を生み出してくれた自然を祝福し、成長させてくれた木に感謝しながら落ちていくように。

人生の理想的な最終形を見事に表現した言葉である。

たぶん最もポピュラーな一節というと以下のものになる。

あたかも一万年も生きるかのように行動するな。生きているうちに、許されている間に善き人たれ。

ドラマを見ていて、こんなことを考えるようだから、ドラマ自体を楽しめるわけがない。おかげで、マルクス・アウレリウスのことを思い出すことができたのでよかった。最後に、彼のフルネームを紹介する。カエサル・マルクス・アウレリウス・アントニヌス・アウグストゥスである。長い。